

# 現代日本のキリスト教教育理論の特徴に関する一考察

## - 1960～70年代のキリスト教幼児教育を中心に -

### A Study of Theories of Christian Education in Japan

#### -A Focus on Christian Early Childhood Education in the 1960s and 1970s -

深谷 潤 FUKAYA, Jun

● 西南学院大学  
Seinan Gakuin University

**Keywords** キリスト教教育, 幼児教育, 教育目的  
christian education, early childhood education, aims in education

#### ABSTRACT

1960～70年代のキリスト教教育は特に幼児教育に力を入れていた傾向にある。日本キリスト教団は、「総合制カリキュラム」(神の民カリキュラム)や「恵みによって生きる」教案を作成し、キリスト教教育を「教会の機能」として捉え、幼児に対しても「信仰教育」の可能性を探っていた。また、キリスト教保育連盟は、幼稚園や保育園においてその保育・教育の指針を作成した。幼児のキリスト教教育指針(1965)は、公教育に合わせた6領域の保育内容によって構成されていたが、幼児のキリスト教教育指針・続(1976)から領域にかわる4つの生活を提唱した。この転換は、今日のキリスト教保育の内容を基礎付けたものと言える。当時のキリスト教幼児教育は、教会と幼稚園・保育園との相違はあるものの、宣教としての性格が強く、幼児をキリストへ導く使命を帯びていた。同時に、教育目的において、教会の外に向かって働きかける必要性を認識し始めた時代であった。

In the 1960s and 1970s, we can see one of the features of Christian education in Japan to be an emphasis on early childhood education. For example, the protestant church Nihon Kirisutokyohdan published a “general curriculum”(Kami no tami Curriculum) and a teaching plan, “Living by God’s Grace”, (Magumi ni yotte Ikiru Kyohan). The group considered Christian Education to be “a function of the church”. In addition, the main issue of Christian education was seen to be “growing Christian faith” in early childhood. On the other hand, the “Federation of Christian Nursery Schools,” (Kirisutokyo Hoiku Renmei) published the “Guide to Early Childhood Christian Education” (Yohji no Kirisutokyo Kyoiku Sisin). In 1976, in a sequel to this guide (Yoji no Kirisutokyo Kyoiku Shishin Zoku), in place of the 6 spheres model advocated

in the earlier publication, one using 4 lifestyles was suggested, similar to that used in the public education system. This view of 4 lifestyles has sidely influenced the philosophy of Christian early childhood education today. In short, a feature of Christian early childhood education formerly was an emphasis on mission and growing Christian faith. Additionally, the aim of Christian education at that time was not only limited to “inside the church”, but also included “outside the church”.

## 1 はじめに

初等・中等・高等教育すべてにわたって大きな改革の波にもまれている今日、教育現場と理論研究の協力の必要性は、以前にも増して極めて重要な課題である。2002年6月に国際基督教大学を会場に「戦後50年のキリスト教教育－その検証と展望－」を主題として、日本キリスト教教育学会が開催された。そこでは「キリスト教教育のめざすもの」として提言がなされ、「独自に新しくキリスト教の教育理論を現場での共同作業を通して作っていくこと」が課題とされた。同時に具体的な3つの課題が提示された。第一は、現代の教育に関する諸問題を歴史の批判的検証に基づいて考察する。第二は、キリスト教学校と教会の連携を図るための方策を検討する。第三は、人間の存在を子どもと人間関係、人権の視点から問い直す、である。<sup>1</sup>

本論稿は、この課題の第一点に関わる歴史的検証に属するものである。今回は、戦後日本のキリスト教教育理論の検証の2回目にあたり、特に1960～70年代を扱う。(終戦～1950年代は別紙参照のこと)。<sup>2</sup>

## 2 1960～70年代当時の教育界

1960年代の日本の教育は、独立国家再建を目指していた。1958年の教育審議会答申の内容には、国民の教育水準を上げ、基礎学力や科学技術教育の向上により、国民生活のレベルアップとともに、国際社会での確かな位置の確保を目指していたことが明記されている。<sup>3</sup> 全国一斉の学力テストが1963年に実施され、高等学校レベルの教育の拡充が求められるようになった。それに合わせて、戦後

の日本人の在り方を示すモデル「期待される人間像」(1966年)も登場した。戦後の混乱から立ち上がり、産業を復興させ、生活水準を上げるために国民全体の教育に力をいれてきた点が60年代の特徴と言えよう。

しかし、国際情勢に合わせ1960年代後半から徐々に社会や国家建設のための教育から、人間のための教育へと目的に変化が表れ出した。小学校・中学校学習指導要領の方向性を決めた教育課程審議会答申には、「人間形成の基礎的な能力の伸長」<sup>4</sup>や、「人間として調和と統一ある発達」<sup>5</sup>といった表現が国民育成や国家の発展よりも前の条項に登場する。

1970年代になると、戦後教育の抜本的改革が目指された。1971年の中央教育審議会答申(「46答申」)<sup>6</sup>には、生涯教育を含め教育体系の総合的再編成の推進、個人の特性に応じた教育方法の改善、教員の資質向上と学校管理体制の強化等の内容が提示されている。生涯教育は別として、個人の特性に応じる姿勢は、個性重視の教育を促し、結果的に能力の高い子どもと低い子どもを選別することにつながった。時期を合わせるように、1979年、共通一次試験が国公立大学入試に導入された。「ゆとり」教育の提言が1976年の小学校・中学校・高等学校の教育課程の基準で初めて触れられていることも看過できない。

## 3 1960～70年代のキリスト教教育界

一方、「期待される人間像」より10年先んじて日本基督教団宣教研究所第3分科会から出された「現代日本におけるキリスト教的人間像」(1956年)が、60年代のキリスト教教育界に大きな影響を与えて

いると言う印象は薄い。同研究所は、この時期にむしろ幼児教育に力を入れている。1962年と67、70年に続けて『キリスト教幼児教育の原理』を出版している。明治期より活動を続けてきた日本キリスト教保育連盟が、1966年に80年史を出版する等、60年代で目立つ動きは、幼児教育関連の出版物の多さである。1969年には「キリスト教保育」（キリスト教保育連盟）が復刊されている。（創刊は1930年）また、現在のキリスト教保育指針の元となる『幼児のキリスト教教育指針』が1965年に出された。他方、キリスト教学校教育の領域では、50年代から引き続き、『日本におけるキリスト教学校教育の展望と課題』（Ⅲ）が1960年に出版されている。また、『基督教主義学校の家庭環境の研究』（1960年）など興味深いテーマで報告書が出されてもいる。

当時のキリスト教教育を象徴するものとして、「ひかりの子」が挙げられる。主に、教会教育のテキストである『教師の友』（日本キリスト教団出版局）に掲載された。荒井仁の指摘によると、「ひかりの子」としての子どもは、教会での伝道の最前線を担う兵士に喩えられていると言う。<sup>7</sup>ここでは、1970年代には、公教育同様キリスト教教育も大きな転機を迎える。それまで、教会形成の機能としての役割が主であったが、教会の外の社会に対する貢献が教育目標の視野に入ってきた。日本キリスト教団教育委員会が1971年にまとめた「恵みによって生きる」教案ガイドブック<sup>8</sup>には、カリキュラムの対象が、「全年令層、教会内、外のキリストの支配の下にあるすべての人々」であり、「生活全領域」を含んでいた。また、「障がい者」など日本社会におけるマイノリティー・グループの観点からキリスト教教育に取り上げられた。<sup>9</sup>この年代で最も重要な点は、キリスト教教育の伝道的性格がキリスト者形成（小林公一他）からキリスト教による人格形成へと変化したことである。基督教学校教育同盟では、キリスト教学校における聖書科の教育目的「キリストへの導き」から「キリストによる導き」へと変化した、と吉住は指摘する。<sup>10</sup>これは、キリスト者の増員を目的とする伝道からキリスト教を基礎とした人間形成へキリスト教教育が相対化されたことを意味する。キリスト教教育は、教会教育の専売

特許ではなく、学校や社会など教会の外における教育活動に広がりをもつようになったのである。

## 4 キリスト教教育の指針

キリスト教教育の現場には、家庭や社会一般を除いて特徴的な場所を挙げるならば、教会、キリスト教学校、キリスト教系保育園・幼稚園がある。そこで展開される教育に一定の指針を与えるための組織が独自に存在している。例えば、教会でのキリスト教教育には日本キリスト教団の各組織があり、例えば、その教育部（National Christian Council in Japan）や宣教研究所がある。また、キリスト教学校には、キリスト教学校教育同盟、園には、キリスト教保育連盟が存在する。どれも戦前からの長い歴史をもっている。1960～70年代に限るならば、出版物の多さから推測すると、キリスト教教育は特に幼児教育に力を入れていた傾向にある。そこで、日本キリスト教団関係やキリスト教保育連盟から出版された資料を中心に、当時のキリスト教教育理論の特徴を探っていくことにしたい。

### 4.1 日本キリスト教団

1960～70年代のキリスト教幼児教育の代表的な業績として、1962年に出版された『キリスト教幼児教育の原理』（日本基督教団宣教研究所第3分科編 日本基督教団出版部）がある。その内容は、神学的検討ばかりではなく、心理学・社会学・教育政策など多岐にわたっている。執筆者をみても、小林公一をはじめ、高崎毅、岩村信二、松川成夫、津守真など、当時のキリスト教教育研究の第一人者が顔をそろえている。出版の背景として、内外協力会（Inter Board Committee）の幼児保育委員会（委員長G. キュクリッヒ）から、キリスト教幼児教育の原理を探求することの要請があり、それに応えるものであった。つまり、日本キリスト教団が主体的に幼児教育の研究に勤めたのではなく、半ば外部の委員会より与えられた課題として幼児教育研究が行なわれたと言える。

当時、幼児のキリスト教信仰を育成することの意義が十分に理解されていたとは思われない。<sup>11</sup>何故

なら、幼児の信仰について「キリスト教幼児教育の心理学的検討」や「神学的検討」の2部にわたり、幼児の信仰が学習されること、幼児の信仰教育の可能性のあることをわざわざ論じているからである。<sup>12</sup> このことから、1960年当時のキリスト教教育界の特徴の一つに「幼児の信仰教育」があったと言える。また冒頭部分で、要請のあった委員会より、「幼稚園と保育所を一本とし、キリスト教幼児教育として考える」と小林が言及している点は、その後、「キリスト教幼児教育」から「キリスト教保育」に指針の表現が変わる過程と合わせて看過すべきでない事実であろう。

さらに、キリスト教幼児教育の意味が、伝道的手段から「教会の機能」<sup>13</sup>として捉えるべきとの主張がなされている点も重要である。1969年『キリスト教幼稚園教師ハンドブック』（改訂版）（日本基督教団教育委員会編）では、キリスト教幼稚園が「教会幼稚園」として存在する場合、その教育のねらいが2つあると指摘されている。その第一点が「教会の機能」としての教育である。その根拠として、高崎毅の「キリスト教教育」の定義が示されている。<sup>14</sup> 第二点は、幼児教育は技能を教え込むのではなく、技能に対する興味や理解の芽生えを養うことであり、言葉や文字を教える「土台」を培うことであるという。<sup>15</sup> 教育内容において、冒頭部分で幼稚園教育要領の6領域について触れている。「宗教」が6領域に追加されるものではなく、全領域の根底に据えられていることを明記している点は、キリスト教教育のカリキュラム論を考察する上で欠かせない要素である。<sup>16</sup>

『キリスト教幼児教育の原理』（1962年）と『キリスト教幼稚園教師ハンドブック』（1969年）の中で指摘された3つの観点、すなわち、①教会の機能、②幼児の信仰、③生活全般は、キリスト教教育の原理における1) 本質論 2) 方法論 3) カリキュラム論の中心的テーマとしてその後展開していくことになる。

1974年に『キリスト教幼児教育概説』が出された。キリスト教教育の意味を扱った項で、これら3点が再び登場する。特に強調されるのは、教会の機能としてのキリスト教教育の意味である。キリス

ト教教育の意味の第一に「キリスト教教育は、宣教のわざとして理解されている。」と述べ、「『委託』された課題」である、と言う。以下計10項目にわたりキリスト教教育の意味が説明され、まとめとして「キリストの福音によって形成されていく共同体の機能として理解される」としている。（下線部引用者）さらに、キリスト教教育とは「キリスト教共同体教育」であるとも定義している。<sup>17</sup> 幼児の信仰については、「嬰兒が最初に出会う人間として、母親との関係がいかに重要なものであるかは、われわれの知るところである。」と述べ、他者との「出会い」の意義の中で触れている。<sup>18</sup> また、生活全般の観点も明記されている。キリスト教教育の意味の第5項目に、「キリスト教教育は『生活の全領域』に関わる内容をもつ。」とある。さらに、生活が分断され個別化されると、生命を失い、固定化した断片にすぎなくなる、と指摘されている。<sup>19</sup>

1977年11月に日本基督教団全国教会幼稚園連絡会が発表した「キリスト教幼児教育および施設についての基本的見解」（ステートメント）には、「教会のわざ」としての幼児教育の意味が明確に記されている。この基本的見解は12項目あり、その冒頭3つは教会の宣教的使命である。幼児教育は、教会の宣教として位置づけられていることが次の引用でもわかる。「私たちが従事している幼児教育のわざも、こうした（社会的奉仕など）教会の多様な奉仕のわざの一つなのである。」（第2項目）また、幼稚園・保育所・施設の形態について触れている箇所でも、「大切なことは、どの形態をとるにしても、それが幼児に対する神の働きかけに参与することであり、教会の宣教的使命として行なわれるところにある。」（第4項目）とある。このように、1970年代後半では、教会の機能としてのキリスト教教育の意義が非常に大きかったと言える。また、この見解では、教会の幼児教育の働きとして、平等を目指し差別と戦うことが記されている。さらに、教育と福祉の両政策の一元化の必要性についても触れられていて興味深い。<sup>20</sup>

この年代のキリスト教教育において最も大きな役割をもっていたのが、教会学校のカリキュラムである。1959年に出された「総合制カリキュラム」（神

の民カリキュラム)や1971年の「恵みによって生きる」教案(日本基督教団教育委員会)は、60～70年代のキリスト教教育のカリキュラムの主流であった。神の民カリキュラムは、日本人による日本人のためのカリキュラムをつくることを目指していた。その内容は、イエス・キリスト、聖書、教会の三つを主題とし、相互に関連させつつ3年周期で学びを進める構造となっていた。その後、教会の外に目を向けたカリキュラムとして「恵みによって生きる」教案が作成された。この世の文化領域全般を視野に入れた内容であり、「生活の全領域で隣り人とともに生きるものとなるように育てること」が教会目標となった。<sup>21</sup>

日本キリスト教団のキリスト教教育の重点は、「教会の機能」や「使命」、「わざ」といった表現から明らかなように教会の内側を強固にする役割にあったと言える。同時に、教会の外に向かって働きかける必要性を少なからず認識していたとも言える。

#### 4.2 キリスト教保育連盟

1960年代・70年代のキリスト教幼児教育の実践の多くは、キリスト教保育連盟が編集・出版した『幼児のキリスト教教育指針』(以下『指針』と略)に基づいていたと言って過言ではない。この『指針』は、キリスト教系幼稚園・保育園のテキストとして、1965年『幼児のキリスト教教育指針』を発端に、その後数々の改訂を経て、現在の『キリスト教保育指針』(改訂)(2000年)に至っている。

キリスト教保育連盟カリキュラム研究委員会が作成した『指針』は、全33ページと言う小誌であるが、その内容には、当時のキリスト教教育の基本的な重要事項が詰まっている。全体は総説、目的、内容の3章構成となっており、内容に関しては、幼稚園教育要領の保育内容に沿って6領域(健康・社会・自然・言語・音楽リズム・絵画製作)に分けられ、それぞれキリスト教幼児教育の目標と聖句、教育内容等がまとめられている。

さて、『指針』において、キリスト教教育の意味はどのように捉えられていたのかまず確認しておきたい。総説には、キリスト教教育の意味や目的、さ

らに幼児理解等、簡潔ではあるが重要な内容が盛り込まれている。

キリスト教の幼児教育施設においては幼児のキリスト教教育の目的に従って幼児をキリスト教へ導く教育が行なわれる。この場合、幼児は幼児なりにその未熟なパーソナリティーにおいて、神の恵みを受容し、応答をなし、信仰を持つことができると考えられるのである。<sup>22</sup>

(下線部引用者)

「キリスト教教育の目的」とは、「信じて義とされ(義認)、生活が聖霊によってきよめられ(聖化)、たえず、主に近づいてゆくことである。」<sup>23</sup>これは、キリスト教教育というよりは、キリスト者全般にわたる生活の目標とも言える。幼児に限定した目的は、「幼児をイエス・キリストにおいて啓示された神との交わりにあずからしめ、神のみ旨に従って生きるように導くことにある。」とされている。この内容は、先述の日本キリスト教団の教育目的と同様、幼児をキリストへ導く「宣教」の色合いが極めて濃いものである。幼児のキリスト教教育は、家庭や施設などで、適切な宗教的環境が整えられ、園や教会の支えの中でなされるべきであると言う。そして、キリスト教教育の行なわれる園は、その母胎が教会であり、密接な関係を保持することが重要とされている。

以上の点を考慮すると、キリスト教幼児教育は、教会を源とした幼児を対象とする宣教と理解される。また、幼児にとって宗教的環境が重要であるが、特に人的環境が要である。そのため、「保育者が召命に立ち、たえず信仰生活に励むこと」が求められている。<sup>24</sup>

キリスト教教育の対象となる幼児は、「未熟」であるが信仰を持つことは可能である、と理解されている。しかし、罪の自覚や信仰告白をする能力はないので、将来を待つことになる、と『指針』には記されている。幼児の信仰の可能性に関してわざわざ明記している点は、日本キリスト教団のものと同様である。また、幼児は「心身の弱いものである」<sup>25</sup>ので、保育者は愛情をもって「保護

養育」に当ること、「具体的でなければ理解できない」ので、キリスト教教育は「常に具体的」であること、とある。<sup>26</sup>

また、幼児の生活の中に聖書の言葉（「神のみ旨」）が活かされるべきとの立場から、言葉を「生活化」させることが目標となっている。6領域に合わせ、6つの目標が定められている。<sup>27</sup>

これらの領域間の関係や生活全般を捉える視点は、必ずしも明確とはいえない。5と6の目標を比較しても、わざわざ二つ設定する理由はあまり見当たらない。『指針』に明記されていないが、文部省の幼稚園教育要領に沿って、そのまま6領域を当てはめた内容となったためであろう。この反省は、次の『幼児のキリスト教教育指針・続』（1976年）〔以下『指針・続』と略〕に活かされることとなる。

『指針・続』で教育内容は、6領域から4つの生活（健康の生活・交わりの生活・探求する生活・表現する生活）に大幅に内容が変更される。その理由は、「6つの領域が教科的に受け取られ、保育の現場で幼児の生活を左右するきらいもあるので、それらがお互いにかかり合って幼児の生活を調和的に導くことを願って4つの領域としたのである。」<sup>28</sup>と述べられている。

また、『指針・続』におけるキリスト教幼児教育の目標は、『指針』と同様6つあるが、その内容はかなり様変わりしている。以前は領域に沿ったものであったが、『指針・続』では、(1) 人間観 (2) 幼児観（交わり）(3) 幼児観（信仰）(4) 幼児観（愛）(5) 世界観（悪）(6) 世界観（賜物）とまとめられる。<sup>29</sup>

先述のように、1970年代になると教育界同様キリスト教教育界も大きな転換点を迎える。それは、教会の外に目を向けたキリスト教教育の在り方を問うものであった。『指針・続』の「キリスト教教育の目的」にもその考えが表れている。「（社会にすんでいるすべての人が）本当の人間として生きるためには、人間を創造し、生かしておられる神と、生涯にわたって正しい関係を保ち続けることが必要である。このことを知り、実践するためには、すべての人がキリスト教教育を受ける必要がある。」<sup>30</sup>（下

線部引用者）1960年代の目標と明確に異なるのは、「本当の人間」として生きるために共同体に参与すべきとか、キリストへ導く等、宣教的表現が薄められている点である。キリスト教教育の基礎として、聖書と教会があることは前提として変わりがない。しかし、教会が礼拝と伝道の中心となる「目に見える教会」以外にも、様々な「活動体」としての教会と言う捉え方が登場している。教育活動も「神の意志を具体化する活動体」である教会が行なうが、それは目に見える教会だけではなく、そこと連結した様々な組織に広がりをもつことを意識した記述となっている。<sup>31</sup> 教会の機能としてのキリスト教教育の捉え方は依然として活きているが、「活動体」と言う表現で「目に見えない教会」におけるキリスト教教育の可能性を明記している点は看過すべきではない。

幼児の信仰について、キリスト教幼児教育の目標(3)では「幼児なりに神の恵みを知り、これを受け入れ」ることが出来ると記されている。幼児の信仰は「自立の過程」において導かれねばならない。その過程は生活を通して展開される。『指針・続』における「生活」概念は、先の『キリスト教幼児教育の原理』におけるキリスト教教育のカリキュラムの及ぶ範囲としての「生活全般」から大きく発展している。それは、『指針』における「個人生活」と「集団生活」<sup>32</sup>の区別や、「生活に生かされる」習慣化とほぼ同義の「生活化」<sup>33</sup>を経て、保育内容そのものを意味する表現へと進化した。『指針・続』における保育内容の説明には「上記の（キリスト教幼児教育の）目標を具体的に幼児が生活してゆくために、(略)」<sup>34</sup>（下線部引用者）とあり、生活が単なる保育内容の領域に留まらず目標達成のプロセスそのもの、さらにその方法としての経験の場（「家庭生活」「集団生活」）を含んだ幅広い内容を含む概念であると言える。

しかし、『指針・続』で初めて登場する4つの生活は、6領域と同様、「教科的」に受け取られる危険性がなかったのであろうか。1989年に出された『キリスト教保育指針』には、「保育内容を考える視点」として、(1) 子どもの生活は、本来総合的に経験されるものである、と述べられている。さらに、

「幼児の生活においても、保育内容は4つの分野に分けて、個別に教科的に体験されるべきではない。」<sup>35</sup>とわざわざ記されている。このことから推測すると、生活自体が4つに分断されて現場で理解されていた反省があったのではないと思われる。また、生活概念は『指針・続』から13年を経て、礼拝や遊びとの強い結びつきの中で展開することになる。

## 5 考察

1960～70年代のキリスト教幼児教育は、教会と幼稚園・保育園との相違はあるものの、宣教としての性格が強く、幼児をキリストへ導く使命を帯びていたと言える。「教会の機能」としてのキリスト教教育の在り方は、幼児教育のみならず、大学も含めた学校教育全体に渡り現在も深く浸透している。<sup>36</sup>また、幼児の信仰に関して当時の理解は、まだ手探り状態と言える。岩村による「パーソナリティー」論は、「他者依存的信仰」を指摘したに留まる。<sup>37</sup>信仰の発達に関する本格的な理論は、ピアジェを下敷きにしたファウラーの信仰発達理論が紹介される1980年代を待たなければならなかった。むしろ、カリキュラム論に関して、この時代は大きな変化と前進があったと考えられる。

公教育に倣い、6領域を遵守して保育内容を構成していた1960年代から、4つの生活を提唱した1970年代の転換は、今日のキリスト教保育の内容を基礎付けたものと言える。この「教科的」であることを避ける「脱カリキュラム」の流れは、I. イリッチの『脱学校の社会』が翻訳された1970年代の「脱学校化」の時流に乗ったものと考えられる。この動きは、キリスト教教育独自の路線を形成する大きな機会でもあった。1993年に日本キリスト教団教育委員会が作成した教会学校向けの教案は、『恵みを共に生きるプログラム』と命名された。カリキュラムからプログラムの変更の理由には、この「脱学校化」を意識したためと言われている。<sup>38</sup>

この年代のキリスト教教育理論研究は、幼児教育分野以外にも様々な業績があったことも付記すべきであろう。学校教育分野やキリスト教教育と神学相互の学問的研究など、個人レベルで多くの文

献が出版されている。<sup>39</sup>20年間に急激な変化を遂げた日本社会において、キリスト教教育の特徴を端的にまとめることはできないが、教会の宣教のためのキリスト教教育目的が、徐々に社会一般のためのキリスト者の形成に傾いていった時期と言える。それは、教会が本来もっていた役割であり、「地の塩」として神と人に奉仕する人間の育成を目指すキリスト教学校教育と呼応する目的でもある。教会形成のための宣教に主眼に置いた内向きキリスト教教育から、世の中に出て世のために働く人材育成を目指す外へのキリスト教教育に大きく転換したのが、1960～70年代なのである。このこと自体は望ましいことと言えるが、その結果、教会の人材育成力が弱まることとなった。教会学校の運営が困難となる事態が発生したのは1980年代半ばからと言われている<sup>40</sup>が、NCC教育部が成立した1970年以降今日にいたるまで、教会教育が徐々に弱体化している事態は、学校・園・家庭を含めたキリスト教教育全体に関わる問題であり、詳細な検証が求められている。

## 参考文献

- 赤岩栄 (1971) 赤岩栄著作集 第7巻 教文館  
荒井仁 (2000) 教会教育のカリキュラムにおける子ども観 キリスト教教育論集 第8号  
日本キリスト教教育学会 pp.135-143  
深谷潤 (2005) 戦後のキリスト教教育理論の変遷 聖和キリスト教教育フォーラム報告 聖和大学キリスト教と教育研究所 pp.38-57  
深谷潤 (2006) キリスト教に基づく教育に関する一考察 キリスト教教育論集第14号 日本キリスト教教育学会 pp.1-11  
岩村信二 (1962) 「キリスト教教育の神学的検討」キリスト教幼児教育の原理 日本基督教団宣教研究所第三分科(編) 日本基督教団出版部 pp.72-112  
基督教学校教育同盟 (1960) 日本におけるキリスト教学校教育の展望と課題 (III)  
基督教学校教育同盟 (1960) 基督教主義学校の家庭環境の研究  
キリスト教学校教育同盟 (1961) 日本におけるキリスト教学校教育の現状  
キリスト教学校教育同盟 (1977) 日本キリスト教教育史：人物篇 創文社  
キリスト教保育連盟 (1965) 幼児のキリスト教教育指針

キリスト教保育連盟 (1976) 幼児のキリスト教教育指  
針・続

キリスト教保育連盟 (1989) キリスト教保育指針

小林公一 (1963) 一般の教育とキリスト教教育 日本基督  
教団出版部 (教師の友文庫)

熊谷 一綱 (1976) キリスト教信仰と教育 日本YMCA  
同盟出版部

黒田成子他 (1974) キリスト教幼児教育概説 日本基督  
教団出版局

文部省 (1967) 小学校の教育課程の改善について[教育  
課程審議会答申]

文部省 (1968) 中学校の教育課程の改善について[教育  
課程審議会答申]

文部省 (1971) 教育改革のための基本的施策—今後にお  
ける学校教育の総合的な拡充整備のための基本的  
施策について— [中央教育審議会答申]

日本キリスト教団教育委員会 (1964) 教師の友 2月号

日本基督教団教育委員会 (1969) キリスト教幼稚園 教  
師ハンドブック改訂版 日本基督教団出版局

日本基督教団教育委員会 (1971) 「恵みによって生きる  
教案 ガイドブック」教師の友 2月号 日本基督  
教団出版局

日本キリスト教団教育委員会 (1972) 教師の友1月号

日本キリスト教団教育委員会 (1977) 教師の友6月号,  
7月号

日本基督教団教育委員会 (1993) 教師の友 1月号 付  
録 日本基督教団出版局

日本基督教団宣教研究所第三分科会 (1962) キリスト教  
幼児教育の原理 日本基督教団出版局

日本基督教団全国教会幼稚園連絡会 (1977) 新キリスト  
教幼児教育の原理

日本キリスト教教育学会 (2003) 戦後50年のキリスト  
教教育—その検証と展望—

日本キリスト教教育学会創立10周年記念研究セミナー報  
告書

奥田和弘 (2003) 1930～1941年の日曜学校教案誌  
にみる日曜学校教育 聖和大学  
キリスト教と教育研究所 pp.85-114

大嶋果織 (2000) NCC教育部は子どもをどう見てきた  
か キリスト教教育論集第8号  
日本キリスト教教育学会 pp.144-157

高崎毅他 (1969) キリスト教教育辞典 日本基督教団出版  
局

武田清子編 (1963) 日本プロテスタント人間形成論 明治  
図書

山北多喜彦 (1959) 総合制カリキュラムの主題について  
(1) 教師の友1月号  
日本基督教団出版局 pp.20-23

山内一郎 (1973) 神学とキリスト教教育 日本基督教団  
出版局

米倉充 (1968) キリスト教教育の理想と現実 青山学院

関西学院編 創文社

吉住英和 (2000) 子どもはどうみられてきたか—学校に  
おける聖書科カリキュラムから、  
キリスト教教育論集 第8号 日本キリスト教教育  
学会 pp.173-180

## 注

- 1 日本キリスト教教育学会(2003), p.130
- 2 1950年代のキリスト教教育理論に関しては深谷  
(2006), pp.1-11を参照.
- 3 文部省(1958)
- 4 文部省(1967)
- 5 文部省(1968)
- 6 文部省(1971)
- 7 荒井, p.142 cf.日本キリスト教団教育委員会  
(1964), p.116
- 8 日本キリスト教団教育委員会 (1971)
- 9 荒井(200),p.139 cf. 日本キリスト教団教育委員会  
(1972), p.130,  
日本キリスト教団教育委員会 (1977) 6月号  
pp.24-25, 7月号pp.20-21
- 10 吉住(2000), p.177
- 11 赤岩(1971) pp.262-274 この著作集には、赤岩  
の小論「日曜学校」(1953)、「私はなぜ日曜学校を  
廃止したか」(1956)が掲載されている。
- 10 日本基督教団宣教研究所第三分科会 (1962)  
心理学的検討と神学的検討の概要を以下に紹介する。  
「キリスト教幼児教育の心理学的検討」によれば、幼  
児は、幼児を取り巻く大人の信仰を学び、社会的学  
習によって信仰は学習されるという。また、幼児は  
発達の各段階に応じて、聖書の正しい理解に基づい  
て信仰が育つ。幼児の探求心は、信仰の教育に重要  
である。「罪」と「救い」の問題は、幼児には十分理  
解されない。幼児たちが、キリスト教幼稚園を自分  
たちの所属する所と感ずることによって、その集団  
の価値を自分のものとして取り入れる。幼児たちが  
親しみをもつように受け入れてやること、自由に活  
動できるようにすることが大切である。  
「キリスト教教育の神学的検討」幼児の信仰教育の可  
能性の問題。  
幼児の信仰の心理学的、実存論的究明は、近代的な  
問題である。聖書の中で語っている所から推察する  
と、幼児にも信仰があり、家庭の中において、信仰  
教育の対象とされたことは自明のことであった。信  
仰を人間の側の自覚的意識のみに局限して考えるこ  
とは誤った近代主義である。むしろ、人間の自覚以  
前において、神の恵みの優先を確認することが正しい  
信仰の把握である。初代教会の信仰ある親たちにと  
って、幼児は未成熟ではあるが、一個の人格とし  
て、神の恵みに応え得る存在であることを前提とし



ていたから、信仰教育が可能であったのである。  
 キリスト教の幼稚園や保育所は、単にキリスト教教育の機関であるばかりではなく、一般の教育、あるいは国民教育の一環をになうものである。教会は「内」なるものに対してのみ責任があるのではなく、「外」なるものに対しても責任があるのである。このことは、キリスト教の「受肉」の教理から必然的に出てくることである。

- 13 「教会の機能」という表現は、例えば、1932年の今村好太郎が日曜学校の友「4月号に掲載した「日曜学校の目的」の中にすでに登場している。Cf. 奥田(2003), p.107
- 14 日本基督教団教育委員会(1969), p.9  
 「教会が人間をして人間たらしめるための継続的な、従ってまたその時々に応じた配慮の責任に他ならないと考える」cf. 高崎毅(1958), p.10
- 15 *ibid.*
- 16 *ibid.*, p.10
- 17 黒田(1974), pp. 24-27
- 18 *ibid.*, p.144 幼児教育の内容に関しては、南信子が7項目を強調している。(安定感, 成長, 生命と死, 祈りと聖書の話, 遊びと集団生活, 社会の中で, イエス様と私)
- 19 *ibid.*
- 20 日本基督教団全国教会幼稚園連絡会(1977), pp.16-20
- 21 山北(1959), 日本基督教団教育委員会(1971)  
 Cf. 深谷(2005), pp.43-45
- 22 キリスト教保育連盟(1965), p.2
- 23 *ibid.*, p.4
- 24 *ibid.*
- 25 *ibid.*, p.2
- 26 *ibid.*, p.5
- 27 *ibid.*, pp.5-6
  1. 健康と安全な生活に必要な日常習慣や態度を養い、神のみ心を行なうために生きるものとして十分な身体的、精神的諸機能の調和を計る。
  2. 幼児に自立の習慣をつけ、キリストにおける愛の交わりを経験させ、自分を失わないで喜んで人に奉仕し、神のみ心が世に行なわれるためにひとりひとりが世の光、地の塩となる心の芽ばえをはぐくむ。
  3. 知恵と力を用いて身の事象を探求し、自然の美しさと神から与えられたいのちの尊さと限らない神の愛を知らせる。
  4. 神によって創造されたものの中で、特に人間だけに与えられたことばを正しく用い、讚美と感謝の生活をするために、聖書に親しみ、祈ることをおぼえ、言語生活の基礎をつくるように導く。
  5. 神の恵みを感謝し、讚美する心を音楽によって表現する興味と能力を養い、創作への芽ばえを

育てる。

6. 神の創造による美しいものに感動する心を育て、生活の中のいろいろの経験を素直に受け入れ、それを表現することによって創造力の芽ばえを養う。
- 28 キリスト教保育連盟(1976), p.3
- 29 キリスト教幼児教育の目標は以下の通りである。*ibid.*, p.6-7
  - (1) すべての人間は、それぞれ独自の人格を神より与えられている被造物であって、他の何人も侵すことのできない尊い生命を与えられている。幼児は力弱くあっても、神によって掛け替えのない存在であり、神の恵みに支えられた価値ある独立の存在である。人間はこの神の恵みに対して、全人的に応答して生きるのであるが、幼児も一個の人格においてなされる決断に基づいて応答して生きるのである。従って、自我の形成されるこの時期に、神の恵みに支えられていることに気づかせ、そのことに対する応答と正しい決断ができるように導く。
  - (2) 幼児の成長に伴って、自他の区別を知り、他人の意見をも認め、協調して交わりを深めるように導く。
  - (3) 幼児は幼児なりに神の恵みを知り、これを受け入れ、幼児としての信仰を持つことができると考えられる。自立の過程において、神の前に謙虚な者となり、神の意志に服従し、信仰をもつように導く。
  - (4) 幼児は神の愛に基礎づけられた家庭生活や集団生活などの共同体の交わりの中にあって、親、兄弟、友だち、保育者の愛を受け、それらを通して神に愛されている自分を知るようになる。幼児はそこで、ひとびとに受け入れられていることを体験し、安定した場を見いだす。幼児に愛が社会を形成するきずなであることを気づかせる。
  - (5) 愛の共同体を破壊するさまざまな種類の悪があることに気づかせ、悪に対して抵抗する者となるように導く。
  - (6) 人間の生きる場としての世界を神からのたまものとして受け、正しく用いることができるように導く。
- 30 *ibid.*, p.4
- 31 *ibid.*, p.5
- 32 キリスト教保育連盟(1965), p.2
- 33 *ibid.*, p.5
- 34 キリスト教保育連盟(1976), p.7
- 35 キリスト教保育連盟(1989), pp.41-42
- 36 教育の神学など、大木英夫氏を中心とする「学校伝道」の立場をとる研究者も少なくない。
- 37 岩村(1962), pp.72-112
- 38 深谷(2005) pp.44-45 cf. 日本基督教団教育委員会(1993)
- 39 学校教育分野では、主に基督教学校教育同盟によるものがある。  
 基督教学校教育同盟(1960), キリスト教学校教育同

盟(1961), キリスト教学校教育同盟(1977) その他  
主な文献は以下の通りである。(論文を除く。出版年  
代順)

武田(1963), 小林(1963), 米倉(1968), 高崎  
(1969), 山内(1973), 熊谷(1976)

- 40 大嶋(2000), p.148 子どもと大人が「共に守る  
礼拝」研究会が1985～1987年度の教会教育委  
員会の活動から生まれた。その背景に、生徒の減少  
による教会学校存続への危機感の共有がある。